

不要秘訣的秘訣

北基行 記

北京 南鐘鼓巷近くの裏衣胡同

秘訣不要の秘訣

『読書の秘訣』、『作文の秘訣』と冠した書や小冊子が、本屋の棚をにぎわしたのは随分前のことだ。内容は空っぽで、こども騙しの類であった。労を惜しみ、秘訣の二字に飛びつき、あとで臍を噛んだ人もいただろう。この頃は、読者も賢くなってこの種の本に手をださなくなった、それでもまだ、努力を惜しみ、秘訣に頼む人が居るようだ。その人たちへの警鐘は鳴らし続けねばならない。

学問の正道を歩み成功を収めた歴代の学者は、誰一人として成功の秘訣を知るものはない。試みに聞くがよい、答えられないだろう。明代の学者、呉夢祥は、自分で学習規律なるものを決めて、壁に貼り付けた。それはこうだ。

“古人讀書、皆須（すべか）らく専心志を致し、門戸を出でず。此の如く工夫を痛下すれば、庶（こいねがわく）ば些（いささ）か根本を立つ可く、以て向上す可し。或は作（おこな）い或は辍（や）む、一曝十寒なれば、則ち讀書百年すると雖も、吾未だ其の可なるを見ず。”

“門戸を出でず”と、家にこもる読書法はいただけないが、その他の規律はおおむねよしとしよう。実際はこうあるべきで、何を学習、研究するにしても一心不乱に学び、

寸暇を惜しみ努力を続ければ、必ず効果が現れる。学習や研究が続かず、途中でほり出し、温め、冷やす、“或は作い或は辍む、一曝十寒”の状態にあれば、早く脱却せねばならない。この点では、呉夢祥の学則は、今日も有益である。

この種学則は、すでに宋代で流行っており、特に朱熹等の理学家が、こんな規則を好んで作った。学則ではないが、ちょっとした経験談として、例えば、陳善の『扞虱新話』にこう書いてある。

“讀書須（すべか）らく出入法を知るべし。始（はじめ）当に以て入る所を求め、終（おわり）当（まさ）に以て出づる所を求め。親切見るを得（う）、此れ是れ入書法なり。透脱用いることを得、此れ出書法なり。蓋し書に入得る能はざれば、則ち古人の用心する處を知らず。能く書より出得ることを知らざれば、則ち又言下に在て死す。惟だ出を知り入を知りて、読書の法得尽くす也。”



朱熹（しゅき 1130年10月18日生～1200年4月23日没）中国南宋の儒学者。朱子（しゅし）と尊称される。儒教の精神・本質を明らかにして体系化を回った朱子学の創始者である。

現在の目からみれば、ありきたりの見解と思うだろう。しかし、陳善は南宋淳熙年間、十二世紀後半の人である。この時代に自分の意見をこれほど鮮明に主張し得たのは、立派なものである。彼の主張は、読書は生きた書を読み、死書を読むということ。即ち、入を知り出を知れである。古人の著作精神と実質内容を咀嚼理解して、字句の丸暗記に陥らないこと、即ち、古人の意を用いた所に気を配り、言下に死してはならないのである。彼はこのほかに、読書の為の読書傾向に反対している。読書は実地に活用され、しかもそれは臨機応変でなければならない。即ちそれが“透脱”することだと言う。彼のこの主張は、一種の反教条主義の主張と読める。この主張は、あまり注目されてこなかったのは、彼の名声が朱熹等からすると遠く及ばなかったからであろう。自己の読書経験に基づく彼のこの主張、これは推薦の価値がある。

宋儒理学の代表人物、たとえば陸九淵の読書経験からも学ぶところが多い。『陸象山語録』にこんな一節がある。“如今の読書は且つ平平讀なり、未だ曉（し）らざる處は且つ放過し、必ず太滯することなかれ。”これに続き、彼は次の詩を挙げる。

“读书切に戒するは慌忙に在り、涵泳の工夫は興味長し。未だ曉（し）らざれば樵（は）かりて放過するを妨げず、切身須く急ぎ思量を要す。”

これは所謂“読書甚だ解すことを求めず”という意味である。甚だ解すこと求めずと云っても、本を読んで理解できなくてもよろしいという意味ではない、難しいところはひとまず飛ばして、そこにこだわり続けるなという意味である。上下巻を読み終わると、分からなかった箇所も分かるかも知れないということだ。もしそれでも分からなければ、何日か擱いてまた考えればよいのだ。現代の青年読者にとってはこの意味は有益である。

現在我々は批判的な読書、即ちその精華をとり、その糟粕を去る、この様な読書を提唱しているが、古代読書人にはこの主張を提案する度胸が無かった。只一人居た。古代に読書機会のない大工が居て、これに類似した思想が芽生えていたらしい。この人は齊国の輪扁である。『莊子』『天道篇』によると：“桓公 堂上に於いて讀書す。輪扁 輪を堂下に斫（き）りしが、椎（つ）い鑿（さく）を釋（お）きて上（のぼ）り、桓公に問いて曰く、敢えて問う、公の読む所は何の言と為す、と。公曰く、聖人の言なり、と。曰く、聖人在りや、と。公曰く、己に死せり、と。曰く、然らば則ち君の読む所は、古人の糟粕のみ、と”。これに続けて、輪扁は自分の仕事の経験を紹介する。彼の話は自己中心の一方的なものであり、“聖人”の言葉を全部否定すべきではないだろう。古人の糟粕に反対し、生産労働を通じて獲得した体験を強調する、これこそ、輪扁にして始めてできる独特の見地である。

これが今の読書法だと威張っても、根は、知れたものだ。これにまつわる秘訣など、あってもこればかりの価値もない。それでも秘訣を所望されるなら、申しませう、秘訣不要が秘訣だ。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

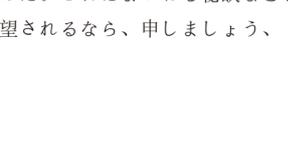
『不要秘訣的秘訣』ひとそえ

この十年来、中国の生活は「中庸」と表現される喰うに困らない状態となり、ゆとりが生まれている事はご承知の通りです。本屋には「〇〇攻略」「△△指南」と題する本が溢れました。調理や外国語上達の安直なハウツー本とともに多かつたのが国内海外旅行のガイドブックでした。「台湾攻略」とか「日本徹底指南」などという背表紙を見ると軍略書ではないことを分かっているにもかかわらず「台湾観光、丸わかり」とか「これで分かった！日本の歩き方」といった意味の新しい表現でした。逆に言うと、本来の「軍事拠点を攻め落とす」の意味が先に出て来る辞書は少々古典的な印象を与えたものです。

この文章が書かれた1960年代の生活は慎ましく、海外への旅行はおろか外国語の書物も貴重品（危険品？）扱いであったと思います。そこで庶民は読書や作文の学習を志し、少しでも昇進して給与査定を上げることになります。志と実行は往々にして食い違い、そこで何とか「生産性を上げる」とか「ショートカットして時間を有効に使う」といった弁明をしつつ「秘訣」を探していたのでしょう。どの時代、どの国でも「楽してマスターするスタイル」は付き物だったようで、「読書秘訣」などの本が売れていたことが冒頭に書かれています。この風潮やスタイルを作者の鄧拓は批判していますが、今から見ると少々常識人・知識人の正論のような印象があります。鄧拓の想いの背後には更に深い意味があるのかもしれませんが、深追いは控えます。

巷間「論語読みの論語知らず」「資本論読みのマルクス知らず」はよく耳にしますし、日本でも「須磨源氏」という言い方で須磨の巻までで息が続かなくなることを揶揄します。現在、観光ガイドブックの売り上げは芳しくないでしょうが、「台湾攻略」が本来の意味に使われることのないことを望みます。

井上邦久



鄧拓（とうたく）（1912年2月26日生～1966年5月18日没）中国の政治学者 作家、人民日報社長文化大革命の中での政治批判により自殺。1979年『燕山夜話』等と共に名譽回復

不要秘訣的秘訣 原文

以前在书店里常常可以看见有所谓《读书秘訣》、《作文秘訣》之类的小册子，内容毫无价值，目的只是骗人。但是，有些读者贪图省力，不肯下苦功夫，一见有这些秘訣，满心欢喜，结果就不免上当。现在这类秘訣大概已经无人问津了吧！然而，我觉得还有人仍然抱着找秘訣的心情，而不肯立志用功。因此，向他们敲一下警钟还是必要的。

历来真正做学问有成就的学者，都不懂得什么秘訣，你即便问他，他实在也说不出。明代的学者吴梦祥自己定了一份学規，上面写道：

“古人读书，皆须专心致志，不出门户。如此痛下工夫，庶可立些根本，可以向上。或作或辍，一暴十寒，则虽读书百年，吾未见其可也。”

看来这个学規中，除了“不出门户”的关门读书的态度不值得提倡以外，一般都是很好的见解。事实的确是这样。不管你学习和研究什么东西，只要专心致志，痛下工夫，坚持不断地努力，就一定要有收获。最怕的是不能坚持学习和研究，抓一阵子又放松了，这就是“或作或辍，一暴十寒”的状态，必需注意克服。吴梦祥的这个学規对我们今天仍然有一些用处。

这种学規早在宋代就十分流行，特别是朱熹等理学家总喜欢搞这一套。但是其中也有不是学規，而是一些经验谈。如陈善的《扞虱新話》一书写道：

“读书须知出入法。始当求所以入，终当求所以出。见得亲切，此是入书法；用得透脱，此是出书法。盖不能入得书，则不知古人用心处；不能出得书，则又死在言下。惟知出知入，得尽读书之法也。”

用现在的眼光读这一段文字，也许觉得他的见解很平常。然而，我们要知道，陈善是南宋淳熙年间，即公元十二世纪后半期的人。在那个时候他能够提出这样鲜明的主张，也算是难能可贵的了。他主张要读活书而不要读死书，就是说要知入知出；要体会古人著作的精神和实质而不要死背一些字句，就是说要体会古人用心处而不可死在言下。不但这样，他还反对为读书而读书的倾向。他主张读书要求实际运用，并且要用得灵活，即所谓“透脱”。你看他的这些主张，难道不是一种反教条主义的主张吗？他的这个主张，过去很少有人注意，因为他的声名远不如朱熹等人，但是他根据自己读书的经验而提出了这种主张，我想这还是值得推荐的。

宋儒理学的代表人物中，如陆九渊的读书经验也有可取之处，《陆象山語録》有一则写道：“如今读书且平平读，未晓处且放过，不必太滯。”接着，他又举出下面的一首诗：

“读书切戒慌忙，涵泳工夫興味长；未晓不妨权放过，切身须要急思量。”

这就是所谓“读书不求甚解”的意思。本来说不求甚解也并非真的不要求把书读懂，而是主张对于难懂的地方先放它过去，不要死扣住不放。也许看完上下文之后，对于难懂的部分也就懂得了；如果仍然不懂，只好等日后再求解释。这个意思对于我们现在的青年读者似乎特别有用。

至于我们在提倡读书要用批判的眼光，要取其精华，去其糟粕，这个主张古代的读书人却没有胆量提出。古代只有一个没有机会读书的木匠，曾经有过类似这种思想的萌芽。这个人就是齐国的轮扁。据《庄子》《天道篇》记载：“桓公读书于堂上，轮扁斫轮于堂下，释椎凿而上，问桓公曰：敢问公之所读何言耶？公曰：圣人之言也。曰：圣人在乎？公曰：已死矣。曰：然则君之所读者，古人之糟粕已夫！”接着，轮扁还介绍了自己进行生产劳动的经验。他的话虽然不免有很大的片面性，他不该把一切所谓“圣人”之言全部否定了；但是，他反对读古人的糟粕，强调要从生产劳动中去体会，这一点却有独到的见地。

我们现在读书的态度和方法，从根本上说，也不过如此。而这些又算得是什么秘訣呢？！如果一定要说秘訣，那末，不要秘訣也就是秘訣了。